あずみ

時は大正末期、場所は東京・高輪。十朱男爵邸。
本誌読者の皆さまに、まずは今宵の主人公、よう子嬢をご紹介いたしましょう。幼少よりお茶と楽器を嗜まれ、今は女学校で勉学に励まれる、愛らしい令女。御年十七、男爵家の末児として、将来の相手は既に定められておりました。
金融業を営むロイド眼鏡の男性が、本日、よう子嬢のマンドリンの披露会のため、男爵邸を訪れております。肥え始めたお腹を張りのあるスーツに押し込んだ三十歳。所謂成金ですが、金回りと人脈の良さは噂に名高い。彼こそが、父親が選んだよう子嬢の許婚。
演奏披露会の後の親睦会で、踏舞をご一緒してご縁を結ぶ。ありふれた政略結婚の道の一つでございました。
と、そこに一石を投じたのが、昨今流行りの怪盗とか申す賊。帝都の夜を跋扈するあやしき影。彼奴めが、三日前に、男爵家に予告状を送って寄越したといいます。
『今宵、十朱家所蔵のお宝《ファベルジェの花束》を頂きますので、ご用意のほど宜しく候。　怪盗エフ』
さて、十朱男爵はお宝を無事守り切ることができるのでしょうか。

＊＊＊

ロイド眼鏡の許婚、富士野は、飽き飽きした表情で山高帽のつばを触っていた。
錦紗や銘仙の大袖を振って広間を練り歩くのは、ほとんどが女学生。群れて喋ればフロアに反響して、何を言っているのかわからない。モダンガールと無責任にもてはやす者もあるが、若い虚栄心のなせる業。
今宵、初めて顔を合わせたよう子嬢は、学友とは違っておとなしい少女だった。洗朱の縮緬に、金糸で桔梗を描いた帯を締め、総絞りの萌葱のしょいあげを大きめに出して秋の訪れを感じさせる装い。七宝焼の帯止の前で小さな手をけなげに組み合わせている。前髪をおろした円顔は幼くて、何を問うてもか細く「ハイ。」と恥じらうばかり。会話が続かず、つまらない。彼の心は、馴染のカフエーの女給のもてなしを求め始めていた。

それでも、華族の姻族という看板が欲しい。戦功叙爵のにわか男爵でも、一般人に違いなどわからない。十朱男爵も大戦景気以降生活の維持が苦しい様子だ。財力と名声で天秤は釣り合う。

富士野は将来の幼女房から離れると、シャンパンで喉を潤しながら広間を物色した。

好みの女学生を見つけ、口内で舌なめずりをする。地味な華文縞を着ているが、年のわりに進んだ気配——あれが男爵令嬢ならどんなにか！

＊＊＊

今朝、当家の裏事情を知らされたばかりの表女中、東雲は給仕をしながらそわそわしていた。

——怪盗！　怪盗!!

浅草は金龍館の絵看板に仰々しく描かれるような悪党が、自分の奉公先に現れるとは、とても現実とは思われない。しかし、怪盗某による侵入盗事件は、最近とみに新聞を賑わせつつあった。

今回、怪盗エフを名乗る者が盗むと予告した《ファベルジェの花束》は、十朱男爵の持つ宝。金の台座に夜光珠の花、翡翠の葉が密集し、朝露のごとく色石を散らした襟飾だ。十朱男爵はこれをさる国の皇室由来の品と信じている。

家令は主人に「しばらく邸に入る人間を絞った方が。」と進言したらしい。しかし十朱男爵は「華族の面子にかけて、既に招待状を送った社交を中止にするわけにはいかない。」と、奉公人に箝口令を敷いて演奏披露会を強行してしまった。予備役とはいえ軍人としての名誉もあるらしく、「警察を頼みにし過ぎれば新聞種にされる。」と物々しい警備を断って、代わりに垣根の周りや庭の植え込みの隅々まで力自慢の男衆を配し、「ふざけた無頼者に目にもの見せてやる。」と息を巻いている。

十朱男爵夫妻は、怪盗エフ対策のため、演奏披露会には挨拶だけ顔を出してすぐに立ち去った。

折角日頃の練習の成果を披露するのに、家族が一人も立ち会わないのだ。東雲は、よう子が気の毒でならない。しかし、あと少しの辛抱だと自分に言い聞かせる。——女の幸福であり、救いであるのは、やはり何と言っても結婚なのだから！

＊＊＊

令嬢よう子は愁眉を前髪に隠し、マンドリンを奏でていた。

どうして多鹿子（たかこ）と言い争いなどしてしまったのだろうか。――ああ、こんな気持ちで今日を迎えるなんて思いもしなかった！

この後の親睦会の卓上装花やクロース、仕出し料理に飲料。新しく誂えた衣物。準備のすべては友を喜ばせるためのものだった。今となっては、すべてが色褪せて見える。

だが、嘆くことばかりでもなかった。多鹿子は欠席せず、来てくれたのだ。最初は気まずいのか遠巻きにしていたけれど、よう子が演奏を始めてから、少しずつ近付いて聴いてくれている。

多鹿子は、片黒、片黄という変わり半衿に重ねて、けぶるような灰色の銘仙を着ていた。華美（はで）なものではなくても、自分に一番似合うようにして着るのが上手なのだ。

彼女に女学校で出会ったよう子は、その気取りのなさに自然に引き寄せられた。箱入りで育ったよう子にしばしばあきれながら、歯に衣着せぬ物言いをする、しっかり者の呉服商のお嬢さん。

しかし廿日（はつか）ほど前、よう子が「許婚がいるから、来年には女学校をやめるの。」と伝えて口論になった後、多鹿子は一切口を利いてくれなくなった。それからよう子は、食欲もなくなり、夜もよく眠れない。

結婚してからも、一生の友でいるというのは、やはりとても難しいことなのだろうか。

思い煩いに気を取られて、よう子はマンドリンから間延びした音を出してしまう。両親が席を外していることが救いだった。怪盗エフに感謝すべきなのかもしれない。

許婚、そして多鹿子には聴かれてしまったけれど。

――あの方のこと、多鹿ちゃんはなんて評するかしら。

仲違いをしたのに、まだ彼女の言葉を聞きたがる自分が、よう子は我ながら可笑しかった。富士野のことを多鹿子が認めるなら、それなら――。その先は考えがまとまらない。

よう子の背後で、バルコニィに通じる玻璃（はり）の扉（と）が、がたがたと揺れる。月の姿はなく、風が強い。唸るような音が、低く高く、十朱邸を切り裂こうとするのが、凶事の前